

上杉雅之(監修), 西守 隆(編著) 医歯薬出版

動作のメカニズムがよくわかる

実践! 動作分析

評者 内山 靖

名古屋大学大学院 医学系研究科

「臨床に役立つよい本ができた」

「多くの人に、タイトルに先入観をもたず、まずは中身をパラパラとでも見てほしい」

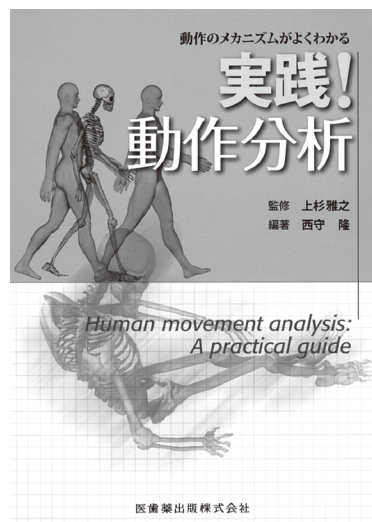
書評を依頼されて、通読直後に感じた率直な印象が上記の言葉です。タイトルからは、動作分析という用語に業界の中でのある種の手垢のついた印象を持たれるかもしれませんが、本書は、臨床動作学について、運動力学と臨床思考過程の双方についてわかりやすく科学的にまとめられた良書です。

これまでの動作分析は、物理、運動力学的な基礎科学としての学問的色彩の強いものか、写真を提示してこの患者は腹筋のトーンスが弱く…といった2つの極に大別されていたように思います。理学療法士・作業療法士の専門性である、基本的・応用的動作能力の回復に直結する“動作を診る”ための科学的基盤と臨床思考過程を整理することは、最重要課題であることは間違いありません。

本書は、全7章224頁とコンパクトな内容ながら、監修・編集者の思いが凝縮された中身の濃いものになっています。第1章では、“臨床における動作観察に必要な運動力学に関する知識”として、非常に読みやすいながらも物理学の基本法則や必要最小限の数式をきちんと記載しています。理学療法士・作業療法士養成課程に入学してくる学生にとって、物理学を解剖や生理学の知識と融合して運動を科学的にとらえることは最初の関門であり、ここで挫折しないように工夫されています。この点は、高大接続の点から教員が果たすべき役割を具体的なメッセージとして発信されているように感じました。第2章は、“臨床における動作観察・分析の進め方”として、症候障害学に基づく臨床思考過程を具体的に解説されています。とくに、逸脱動作について、機能不全と代償を見分ける視点が強調されていることは臨床的に有用な着眼点と言えます。

第3から6章は、起き上がり、立ち上がり、歩行、ホッピングの各動作について、運動学的な解説の後に逸脱動作の解釈について提示されています。第7章は、“臨床における動作分析の実際”として、変形性関節症、関節リウマチ、脳卒中、パーキンソン病など16の症例を臨床家が執筆し、現場での具体的な臨床推論を提示しています。

本書は、理学療法・作業療法を学ぶ学生にとって座右の書であり、また、学内教育において早くから臨床での思考過程に沿った学習を取り入れるためのテキストにも適しています。多くの皆様が本書を手にとられることで、動作分析の標準化と科学性の向上が期待されます。



B5判・224頁・2色刷
定価：本体4,200円＋税
医歯薬出版刊、2016年